

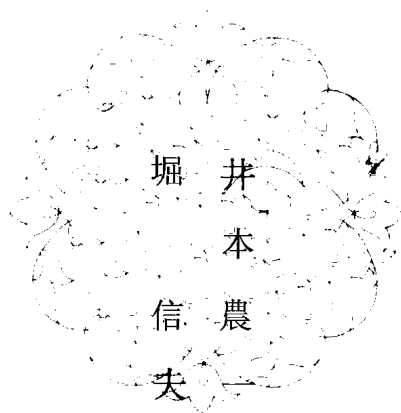
芭蕉集全



古典俳文學

古典俳文学大系 5

芭蕉集全



校注

集英社

古典俳文学大系 5

芭蕉集

昭和四十五年七月十日 初版発行
昭和五十年十一月三十日 二版発行

校注者 井本 農 一
堀 信 夫

編集 株式会社創美社

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇
出版部(〇三)二三〇一六三六一
電話
販売部(〇三)二三〇一六一七一

印刷 大日本印刷株式会社
大文堂印刷株式会社

定価 四九〇〇円

乱丁・落丁本はお取り替えます。
著者との了解により検印を廃止いたします。

1392-120005-3041

©1970

目次

解説	三
凡例	三

発句編

例言	三
寛文期	三
延宝期	元
天和期	三
貞享期	四
元禄期	六
年次不詳	一六
存疑の部	一三
その一	一三
存疑の部	その二
偽作の部	一八
誤伝の部	一九

連句編

例言	三六
----	----

寛文五年

一 野は雪に(百韻)	三九
------------	----

寛文七年以前

二 かたに着物(付合)	三二
三 後生ねがひと(付合)	三二
四 賤が寝さまの(付合)	三一

寛文十年

五 君も臣も(付合)	三二
六 抜は露の(付合)	三二

延宝三年

七 いと涼しき(百韻)	三二
-------------	----

延宝四年以前

八 草の庵(付合)	三三
-----------	----

九 焼には(付合)	三三
-----------	----

一〇 月の中の(付合)	三三
一一 松のこずあに(付合)	三三

一二 川かぜ寒き(付合)	三三
一三 たまのちぎりに(付合)	三三

一四 むつくりと(付合)	三四
--------------	----

延宝四年

一五 此梅に(百韻)	三四
一六 梅の風(百韻)	三六

七 時節嘆(歌仙)……………三六

延宝五年

六 色付や(百韻)……………三九
元 あら何共なや(百韻)……………三九

延宝六年

三 物の名も(百韻)……………三三
三 さぞな都(百韻)……………三三
三 実や月(歌仙)……………三七
三 のまれけり(歌仙)……………三六
三 青葉より(歌仙)……………三九
三 塩にしても(歌仙)……………三九
三 わすれ草(歌仙)……………三九

延宝六年以前

三 宝いくつ(付合)……………三三
元 手盥に(付合)……………三三
元 経によう似た(付合)……………三三
三 寐覚佐しき(付合)……………三三
三 御息所の(付合)……………三三
三 大鋸屑の(付合)……………三三
三 虫の髭(付合)……………三三
三 孔子は鯉魚の(付合)……………三三
三 脱経芝居(付合)……………三三
三 捨る身も(付合)……………三三
三 鉄灸に(付合)……………三三
元 膳棚の(付合)……………三三
元 碓の(付合)……………三三
三 武者ぶりを(付合)……………三三
三 桶一つ(付合)……………三三
三 馬の脊(付合)……………三三

三 もすそを見れば(付合)……………三三
三 うなり声(付合)……………三三
三 あつたら真桑(付合)……………三三
三 相揚に立し(付合)……………三三
三 上は脇ざし(付合)……………三三
三 魚の腸(付合)……………三三
三 大屋の退屈(付合)……………三三
三 わかし語(付合)……………三三

延宝七年

三 須厂ぞ秋(百韻)……………三三
三 見渡せば(百韻)……………三三

天和元年

三 山里いやよ(付合)……………三三
三 葛西の院の(付合)……………三三
三 ものゝふの(付合)……………三三
三 鶯の足(五十韻)……………三三
三 春澄にとへ(百韻)……………三三
元 世に有て(百韻)……………三三
元 附贅一ツ(付合)……………三三
三 秋とはよ(付合)……………三三

延宝年間

三 蛙の時(付合)……………三三
三 塔高し(付合)……………三三
三 はりぬきの(付合)……………三三

天和二年

三 錦どる(百韻)……………三三
三 蒜の籬に(付合)……………三三
三 花にうき世(歌仙)……………三三
三 田螺とられて(世吉)……………三三

六 月と泣夜(歌仙)……………三八
三 詩あきんど(歌仙)……………三八
三 鮎やことし(歌仙)……………三八

天和三年

三 胡艸(歌仙)……………三三
三 夏馬の運行(歌仙)……………三三

貞享元年

三 栗野老(付合)……………三三
三 何となう(付合)……………三三
三 ばせを野分(付合)……………三三
三 宿まゐらせむ(付合)……………三三
三 花の咲(付合)……………三三
三 師の桜(歌仙)……………三三
三 霜の宿の(付合)……………三三
三 能程に(付合)……………三三
三 此海に(表六句)……………三三
三 しのぶさへ(付合)……………三三
三 狂句こがらしの(歌仙)……………三三
三 はつ雪の(歌仙)……………三三
三 つみかねて(歌仙)……………三三
三 炭売の(歌仙)……………三三
三 霜月や(歌仙)……………三三
三 いかに見よと(表六句)……………三三
三 市人に(付合)……………三三
三 馬をさへ(付合)……………三三
三 海くれて(歌仙)……………三三
三 檜笠(付合)……………三三

貞享二年

三	われもさびよ(付合)	三九
四	霜白し(付合)	三〇
五	我桜(付合)	三一
六	樗の木(付合)	三二
七	梅絶て(付合)	三三
八	幸崎の(付合)	三四
九	何とはなしに(歌仙)	三五
一〇	つくぐと(歌仙)	三六
一一	ほととぎす(歌仙)	三七
一二	杜若(二十四句)	三八
一三	おもひ立(十二句)	三九
一四	牡丹薬(歌仙)	四〇
一五	夏草よ(付合)	四一
一六	涼しさの(百韻)	四二
一七	日出度人の(付合)	四三

貞享元・二年

一八	独書をみる(付合)	四四
一九	侘おもしろく(付合)	四五
二〇	榎木の風の(付合)	四六
二一	小僧ふたりぞ(付合)	四七
二二	我恋は(付合)	四八
二三	薄をきりて(付合)	四九

貞享三年

二四	日の春を(百韻)	五〇
二五	花咲て(歌仙)	五一
二六	古池や(付合)	五二
二七	深川は(付合)	五三
二八	蜻蛉の(半歌仙)	五四

貞享四年

二九 冬景や(三十四句)……………五五

三〇	久かたや(歌仙)	五五
三一	花に遊ぶ(歌仙)	五六
三二	卯花も(付合)	五七
三三	蜻蛉よ(付合)	五八
三四	時は秋(歌仙)	五九
三五	旅人と(世言)	六〇
三六	江戸桜(半歌仙)	六一
三七	しろがねに(付合)	六二
三八	時雨く(付合)	六三
三九	京までは(歌仙)	六四
四〇	めづらしや(歌仙)	六五
四一	星崎の(歌仙)	六六
四二	閑炭や(表六句)	六七
四三	麦はえて(付合)	六八
四四	やき飯や(表六句)	六九
四五	笠寺や(歌仙)	七〇
四六	幾落葉(付合)	七一
四七	面白し(付合)	七二
四八	磨なほす(歌仙)	七三
四九	薬のむ(付合)	七四
五〇	風の(三十句)	七五
五一	ためつけて(歌仙)	七六
五二	旅人と(半歌仙)	七七
五三	寂かと(表六句)	七八
五四	箱根越す(歌仙)	七九
五五	たび寐よし(半歌仙)	八〇
五六	露凍て(二十四句)	八一
五七	かちならば(付合)	八二
五八	かれ枝に(付合)	八三

元禄元年

一	何の木の(歌仙)	八四
二	梅の木の(発句・脇)	八五
三	暖簾の(発句・脇)	八六
四	紙衣の(十七句及び付句)	八七
五	時雨てや(発句・脇)	八八
六	さまんの(発句・脇)	八九
七	杜若(三句)	九〇
八	しるべして(発句・脇)	九一
九	鼓子花の(歌仙)	九二
一〇	どこまでも(表六句)	九三
一一	蓮池の(五十韻)	九四
一二	見せばやな(発句・脇)	九五
一三	山かげや(発句・脇)	九六
一四	蔵のかげ(三句)	九七
一五	よき家や(表六句)	九八
一六	初秋は(歌仙)	九九
一七	粟稗に(歌仙)	一〇〇
一八	色々のきくも(五句)	一〇一
一九	見送りの(発句・脇)	一〇二
二〇	しら菊に(半歌仙)	一〇三
二一	厂がねも(歌仙)	一〇四
二二	月出ば(半歌仙)	一〇五
二三	其かたち(歌仙)	一〇六
二四	雪の夜は(歌仙)	一〇七
二五	雪ごとに(歌仙)	一〇八
二六	皆拌め(三十句)	一〇九

元禄二年

一	水仙は(歌仙)	一一〇
二	衣装して(歌仙)	一一一

一七	かげろふの(歌仙).....	三〇三
一八	月花を(発句・脇).....	三〇六
一九	萩おふ(歌仙).....	三〇六
二〇	落くるや(発句・脇).....	三〇六
二一	風流の(歌仙).....	三〇六
二二	旅衣(三句).....	三〇九
二三	茨やうを(三句).....	三〇九
二四	かくれ家や(歌仙).....	三〇九
二五	雨晴て(四句).....	三一
二六	すとしさを(歌仙).....	三一
二七	おきふしの(歌仙).....	三三
二八	さみだれを(歌仙).....	三三
二九	水の奥(三句).....	三四
三〇	御尋に(歌仙).....	三四
三一	風の香も(二句).....	三五
三二	有難や(歌仙).....	三七
三三	めづらしや(歌仙).....	三七
三四	涼しさや(七句).....	三八
三五	温海山や(歌仙).....	三八
三六	忘るなよ(四句).....	三九
三七	忘なよ(歌仙).....	三九
三八	文月や(二十句).....	三〇
三九	星今宵(二十六句).....	三二
四〇	薬欄に(四句).....	三三
四一	寐る迄の(四句).....	三三
四二	残暑暫(半歌仙).....	三三
四三	小鯛さす(表六句).....	三三
四四	しをらしき(四十四).....	三三
四五	ぬれて行や(五十句).....	三四
四六	馬かりて(歌仙).....	三六
四七	あなむざんやな(歌仙).....	三七
四八	もの書て(発句・脇).....	三七

三〇	胡蝶にも(発句・脇).....	三六
三一	野あらしに(半歌仙).....	三六
三二	こもり居て(表六句).....	三六
三三	それ／＼に(三句).....	三六
三四	はやう咲(歌仙).....	三六
三五	秋の暮(四句).....	三六
三六	一泊り(歌仙).....	三六
三七	いざ子ども(歌仙).....	三六
三八	とり／＼の(五十韻).....	三六
三九	霜に今(歌仙).....	三六
四〇	曉や(五十韻).....	三六
四一	少将の(発句・脇).....	三六
四二	草薺(発句・脇).....	三六

元禄三年

三〇	梅若菜 その一(歌仙).....	三〇
三一	梅若菜 その二(歌仙).....	三〇
三二	芽出しより(五句).....	三〇
三三	蠅ならぶ(歌仙).....	三〇
三四	牛部屋に(歌仙).....	三〇
三五	安々と(歌仙).....	三〇
三六	御明の(歌仙).....	三〇
三七	うるはしき(歌仙).....	三〇
三八	草の戸や(発句・脇).....	三〇
三九	たふとがる(発句・脇).....	三〇
四〇	木嵐に(発句・脇).....	三〇
四一	もらぬほど(半歌仙).....	三〇
四二	水仙や(十二句).....	三〇
四三	奥庭も(発句・脇).....	三〇
四四	其にほひ(歌仙).....	三〇
四五	此里は(歌仙).....	三〇
四六	京に(八句).....	三〇
四七	宿かりて(三句).....	三〇

元禄四年

元禄五年

三〇	鶯や(歌仙).....	三六
三一	破風呂に(和漢歌仙).....	三六
三二	名月や(半歌仙).....	三六
三三	青くても(歌仙).....	三六
三四	苅かぶや(歌仙).....	三六
三五	秋にそやて(三句).....	三六
三六	けふばかり(歌仙).....	三六
三七	口切に(歌仙).....	三六
三八	月代を(十八句).....	三六
三九	水鳥よ(歌仙).....	三六

三六	寒菊の(三句)……………	三六
三六	洗足に(歌仙)……………	三六
三六	打よりて(歌仙)……………	三六
三七	木枯しに(半歌仙)……………	三七
三七	としわすれ(三句)……………	三七
三七	両の手に(歌仙)……………	三七
元禄六年		
三七	菊蕚に(歌仙)……………	三七
三七	野は雪に(歌仙)……………	三七
三七	梅が香や(三句)……………	三七
三七	人声の(発句・脇)……………	三七
三七	風流のまこと(歌仙)……………	三七
三七	春風や(発句・脇)……………	三七
三七	篠の露(歌仙)……………	三七
三八	其富士や(歌仙)……………	三八
三八	朝顔や(歌仙)……………	三八
三八	初茸や(歌仙)……………	三八
三八	帷子は(歌仙)……………	三八
三八	いざよひは(歌仙)……………	三八
三八	十三夜(歌仙)……………	三八
三八	漆せぬ(三句)……………	三八
三八	月やその(三句)……………	三八
三八	振売の(歌仙)……………	三八
三八	芹焼や(歌仙)……………	三八
三八	武士の(表六句)……………	三八
三八	後風(二十四句)……………	三八
三八	雪の松(歌仙)……………	三八
三八	いさみたつ その一(歌仙)……………	三八
三八	いさみ立 その二(歌仙)……………	三八
三八	寒菊や(三十二句)……………	三八
三八	雪や散る(半歌仙)……………	三八

元禄五・六年		
三七	生ながら(歌仙)……………	三七
元禄七年		
三六	年たつや(八句)……………	三六
三六	長閑さや(三句)……………	三六
三六	雛ならで(三句)……………	三六
三六	むめがゝに(歌仙)……………	三六
三六	傘に(歌仙)……………	三六
三六	五人ぶち(歌仙)……………	三六
三六	八九間 その一(歌仙)……………	三六
三六	八九間 その二(歌仙)……………	三六
三六	水音や(半歌仙)……………	三六
三六	空豆の(歌仙)……………	三六
三六	卯の花や(発句・脇)……………	三六
三六	紫陽草や(歌仙)……………	三六
三六	新麦は(歌仙)……………	三六
三六	やはらかに(発句・脇)……………	三六
三六	世は旅に(歌仙)……………	三六
三六	水鶏啼と その一(歌仙)……………	三六
三六	水鶏なくと その二(歌仙)……………	三六
三六	柳行李(歌仙)……………	三六
三六	牛流す(歌仙)……………	三六
三六	鶯に(歌仙)……………	三六
三六	葉がくれを(歌仙)……………	三六
三六	夕良や その一(歌仙)……………	三六
三六	夕がほや その二(歌仙)……………	三六
三六	夏の夜や(歌仙)……………	三六
三六	菜種ほす(発句・脇)……………	三六
三六	ひらくと(歌仙)……………	三六
三六	秋ちかき(歌仙)……………	三六

三六	荒くて その一(歌仙)……………	三六
三六	あれくで その二(歌仙)……………	三六
三六	残る蚊に(三十句)……………	三六
三六	折くや(発句・脇)……………	三六
三六	稻妻に(表六句)……………	三六
三六	百合過て(六句)……………	三六
三六	松茸に(表六句)……………	三六
三六	松茸や(十六句)……………	三六
三六	つぶく(と)(歌仙)……………	三六
三六	松茸や(歌仙)……………	三六
三六	松風に(五十韻)……………	三六
三六	猿蓑に(歌仙)……………	三六
三六	升買て(歌仙)……………	三六
三六	繭もはや(歌仙)……………	三六
三六	秋風に(三句)……………	三六
三六	妖の夜を(半歌仙)……………	三六
三六	此道や(半歌仙)……………	三六
三六	白菊の(歌仙)……………	三六
年次未詳の部		
三六	琴弾ならふ(付合)……………	三六
三六	酒に興ある(付合)……………	三六
三六	抱あげらるゝ(付合)……………	三六
三六	もえかねる(付合)……………	三六
三六	古寺や(三句)……………	三六
三六	香炉の灰の(付合)……………	三六
三六	麦に来て(付合)……………	三六
三六	鉦一つ(付合)……………	三六
三六	打こぼしたる(付合)……………	三六
三六	ぼんとぬけたる(付合)……………	三六
三六	枯はてゝ(付合)……………	三六
三六	龜山や(付合)……………	三六

三三	宵の間は（付合）	四二五
三三	笠敷て（付合）	四二五
三三	冬の砵の（付合）	四二六
三三	春嬉し（三句）	四二六
三三	煤掃の（付合）	四二六
三三	鐘つく人も（付合）	四二六
三三	庭に簾を（付合）	四二六
三三	入相の（付合）	四二六
三三	空也の鹿の（付句一句）	四二六
三三	やしきの客は（付合）	四二七
三三	桜をこぼす（付合）	四二七
三三	綿ふきありく（付合）	四二七
三三	端居がちなる（付合）	四二七
三三	門に入れば（付合）	四二七
三三	石も木も（付合）	四二七
三三	名残ぞと（付合）	四二七

三三	革踏皮の（付合）	四二七
三三	右左リ（付合）	四二六
三三	うき恋に（付合）	四二六
三三	庵寺の（付合）	四二六
三三	引おこす（表六句）	四二六
三三	菅簍の（発句・脇）	四二六
三三	梅咲窓に（前句）	四二六
三三	菊折に（前句）	四二六

存疑の部

一	さゝげたり（表八句）	四二九
二	小傾城（表八句）	四二九
三	松杉に（十句）	四二九
四	いざかたれ（歌仙）	四三〇
五	赤人も（付合）	四三〇
六	百景や（三句）	四三二

七	ひよろくと（付合）	四三一
八	笠寺や（三句）	四三一
九	いざさらば（表六句）	四三一
一〇	杜若（付合）	四三一
一一	寂しさの（歌仙）	四三一
一二	重くと（歌仙）	四三一
一三	あかくと（発句・脇）	四三一
一四	湖水より（三句）	四三一
一五	薄原（三句）	四三一
一六	米くるゝ（発句・脇）	四三一
一七	庵の夜も（発句・脇）	四三一
一八	飯橋に（二句）	四三一
一九	十六夜の（発句・脇）	四三一
二〇	松の花（歌仙）	四三一
二一	のたりくと（付句一句）	四三一

紀行・日記編

例言	四二六
一 野ざらし紀行（甲子吟行）	四二六
二 鹿島詣（鹿島紀行）	四二六

三 更科紀行	四二三
四 笈の小文	四二六
付、庚午紀行	

五 おくのはそ道	四二四
六 嵯峨日記	四二〇

俳文編

例言	四二六
一 柴の戸	四二九
二 「我ためか」詞書	四二九
三 独寝の草の戸	四二九
四 乞食の翁	四二九
五 寒夜ノ辞	四三〇

六 夏野画讃	四三〇
七 「虚栗」の跋	四三〇
八 歌仙の讃	四三一
九 士峯の讃	四三一
一〇 馬に寝て	四三一
一一 粗する音	四三二

一二 竹の奥	四三二
一三 法の松	四三二
一四 「きぬたうちて」詞書	四三二
一五 酒に梅	四三二
一六 一枝軒	四三二
一七 三つの名	四三二

六 垣穂の梅……………	三〇五
元 「伊勢紀行」の跋……………	三〇六
三 四山の瓢……………	三〇八
三 雪まるげ……………	三〇八
三 初雪……………	三〇八
三 閑居ノ箴……………	三〇九
三 「養虫ノ説」跋……………	三〇九
三 保美の里……………	三二〇
三 権七にしめす……………	三二一
三 杖突坂の落馬……………	三二一
六 としのくれ……………	三二二
元 うに掘る岡……………	三二三
三 伊勢参宮……………	三二三
三 伊賀新大仏之記……………	三二四
三 「猶見たし」詞書……………	三二五
三 「ほろ／＼と」詞書……………	三二六
三 あすならう……………	三二六
三 高野登山端書……………	三二七
三 湖仙亭の記……………	三二七
三 「やどりせむ」の句入面讀……………	三二七
三 十八樓ノ記……………	三二八
三 鶴舟……………	三二九
三 更科姨捨月之弁……………	三二九
三 素堂亭十日菊……………	三三〇
三 芭蕉庵十三夜……………	三三〇
三 越人におくる……………	三三一
三 深川八貧……………	三三一
三 「曠野集」の序……………	三三三
三 「草の戸も」詞書……………	三三三
三 秋鴉主人の佳景に對す……………	三三三
三 夏の時鳥……………	三三三
三 「野を横に」詞書……………	三三三

三 高久の宿のほととぎす……………	三三四
三 奥の田植歌……………	三三四
三 「かくれ家や」詞書……………	三三五
三 文字摺石……………	三三六
三 「笠嶋や」詞書……………	三三八
三 松嶋……………	三三九
三 天有法印追悼の文……………	三三九
三 玉志亭佳興……………	三三九
三 銀河ノ序……………	三三九
三 「栗欄に」詞書……………	三四〇
三 温泉ノ頌……………	三四〇
三 敦賀にて……………	三四〇
三 紙食ノ記……………	三四一
三 明智が妻……………	三四一
三 少將の尼……………	三四一
三 洒落堂記……………	三四一
三 重ねを賀す……………	三四一
三 幻住庵記……………	三四一
三 四糸河原涼……………	三四六
三 雲竹の讀……………	三四六
三 鳥之賦……………	三四八
三 卒塔婆小町讀……………	三四九
三 落柿舎記……………	三四〇
三 堅田十六夜之弁……………	三四一
三 成秀庭上松を嘗ること集……………	三四二
三 阿弥陀坊……………	三四三
三 「忘梅」の序……………	三四四
三 明照寺李由子に宿す……………	三四四
三 島田のしくれ……………	三四五
三 雪の枯尾花……………	三四五
三 栖去之弁……………	三四五
三 芭蕉を移す詞……………	三四五

三 机銘……………	三四六
三 三聖図讀……………	三四六
三 僧專吟餞別之詞……………	三四六
三 許六離別ノ詞（柴門ノ辭）……………	三四九
三 許六を送る詞……………	三四九
三 弔三初秋七日ノ雨星……………	三四一
三 閑閑之説……………	三四二
三 悼三松倉風蘭……………	三四三
三 東順ノ伝……………	三四三
三 素堂菊園之遊……………	三四三
三 「稻づまや」詞書……………	三四六
年代未詳の部	
三 笠の記（洪笠ノ銘）……………	三四七
三 杵折の賛……………	三四九
三 塔山送別……………	三四九
三 西行像讀……………	三四九
三 贈三風絃子ノ号……………	三四〇
三 亀子が良才……………	三四〇
存疑の部	
一 「霞やら」面贊……………	三四一
二 「低う来る詞書……………	三四一
三 水の音……………	三四一
四 瓢の銘……………	三四二
謠伝の部（參考）	
一 黒髪山・裏見の滝・一家に遊女……………	三四三
二 鉢たたきのうた……………	三四三
三 汐路の鐘……………	三四三
四 硯石……………	三四四

書簡編

例言

一 高山伝右衛門(鷹崎)宛
(延宝九年五月十五日付)……………五七

二 木因宛
(延宝九年七月二十五日付)……………五七

三 木因宛(延宝九年秋筆)……………五七

四 木因宛(天和二年二月上旬付)……………五七

五 付・濁子宛(三月上旬頃筆)……………五七

六 木因宛(天和二年三月二十日付)……………五七

七 木示(桐葉)宛
(天和年中・五月三日付)……………五八

八 無宛名(貞享元年・二年頃筆か)……………五八

九 半残宛
(貞享二年正月二十八日付)……………五八

一〇 其角宛(貞享二年四月五日付)……………五八

一一 千那宛(貞享二年五月十二日付)……………五八

一二 千那・尚白・青鴉宛
(貞享二年七月十八日付)……………五八

一三 去来宛(貞享三年閏三月十日付)……………五八

一四 寂照(知足)宛
(貞享三年閏三月十六日付)……………五八

一五 寂照(知足)宛
(貞享三年十月二十九日付)……………五八

一六 寂照(知足)宛
(貞享三年十二月一日付)……………五八

一七 東藤・桐葉宛
(貞享三年・四年三月十四日付)……………五八

一八 寂照(知足)宛
(貞享四年正月二十日付)……………五八

一九 寂照(知足)宛
(貞享四年春筆か)……………五八

二〇 寂照(知足)宛
(貞享四年十一月二十四日付)……………五八

二一 半左衛門宛
(貞享四年間筆か)……………五八

二二 平庵宛(元禄元年二月十一日付)……………五八

二三 杉風宛(元禄元年二月中旬筆)……………五八

二四 宗七宛(元禄元年二月十九日付)……………五八

二五 惣七(猿雛)宛
(元禄元年四月二十五日付)……………五八

二六 卓袋宛
(元禄元年四月二十五日付)……………五八

二七 卓袋(推定)宛
(元禄元年四月末筆か)……………五八

二八 柏屋市兵衛(卓袋)宛
(元禄元年九月十日付)……………五八

二九 益光宛(元禄元年十二月三日付)……………五八

三〇 尚白宛(元禄元年十二月五日付)……………五八

三一 半左衛門宛
(元禄二年正月十七日付)……………五八

三二 嵐閣宛
(元禄二年閏正月二十六日付)……………五八

三三 猿雛(推定)宛
(元禄二年閏正月筆か)……………五八

三四 桐葉宛(元禄二年二月十五日付)……………五八

三五 惣七(猿雛)・宗無宛
(元禄二年二月十五日付)……………五八

三六 何云宛(元禄二年四月下旬筆)……………五八

三七 如行宛
(元禄二年七月二十九日付)……………五八

三八 慶生宛(元禄二年八月二日付)……………五八

三九 卓袋(推定)宛
(元禄二年九月十日付)……………五八

四〇 山岸十左衛門宛
(元禄二年九月筆)……………五八

四一 木因宛(元禄二年九月十五日付)……………五八

四二 杉風(推定)宛
(元禄二年九月二十二日付)……………五八

四三 荷兮宛(元禄三年正月二日付)……………五八

四四 式之・槐市宛
(元禄三年正月五日付)……………五八

四五 万菊丸(杜園)宛
(元禄三年正月十七日付)……………五八

四六 智月宛(元禄三年正月十九日付)……………五八

四七 句空(推定)宛(元禄三年春筆か)……………五八

四八 高橋喜兵衛(総誂)宛
(元禄三年四月八日付)……………五八

四九 如行宛(元禄三年四月十日付)……………五八

五〇 此筋・千川宛
(元禄三年四月十日付)……………五八

五一 怒離宛(元禄三年四月十日付)……………五八

五二 酒堂宛(元禄三年四月十六日付)……………五八

五三 北枝宛
(元禄三年四月二十四日付)……………五八

三七 又七(乙州)宛

三四 (元禄三年四・五月頃筆)……………六四

三五 小春宛(元禄三年六月二十日付)……………六四

乙州宛

三六 (元禄三年六月二十五日付)……………六四

浜田珍夕宛

三六 (元禄三年六月二十六日付)……………六五

三六 曲水宛(元禄三年六月三十日付)……………六五

三六 牧童宛(元禄三年七月十七日付)……………六六

三六 去来宛

三六 (元禄三年七月上旬頃筆)……………六七

智月宛

三六 (元禄三年七月二十三日付)……………六七

三六 高橋喜兵衛(怒離)宛

三六 (元禄三年七月二十四日付)……………六七

三六 去来宛(元禄三年七・八月頃筆)……………六八

三六 千那宛(元禄三年八月四日付)……………六八

加生(凡兆)宛

三六 (元禄三年八月十八日付)……………六九

三六 曲水宛(元禄三年九月六日付)……………六九

加生(凡兆)宛

三六 (元禄三年九月十三日付)……………六〇

茶屋与次兵衛(昌房)宛

三六 (元禄三年九月二十六日付)……………六二

怒離宛

三六 (元禄三年九月二十七日筆)……………六二

正秀宛

三六 (元禄三年九月二十八日付)……………六三

与次兵衛(昌房)宛

三六 (元禄三年九月二十八日付)……………六三

七 ひとめ(羽紅)宛

(元禄三年九月末筆)……………六三

三三 嵐蘭宛

三三 (元禄三年十月二十一日付)……………六三

三三 句空宛(元禄三年十一月筆)……………六三

北枝(推定)宛

三三 (元禄四年正月三日付)……………六四

句空(推定)宛

三三 (元禄四年正月三日付)……………六四

三三 曲水宛(元禄四年正月五日付)……………六五

三三 正秀宛(元禄四年正月十九日付)……………六五

三三 嵐蘭宛(元禄四年二月十三日付)……………六六

怒離宛

三三 (元禄四年二月二十二日付)……………六六

支幽・虚水宛

三三 (元禄四年二月二十二日付)……………六七

珍夕宛

三三 (元禄四年二月二十二日付)……………六七

去来(推定)宛

三三 (元禄四年三月九日付)……………六八

意専(猿離)宛

三三 (元禄四年五月十七日付)……………六九

正秀宛

三三 (元禄四年五月二十三日付)……………六九

三三 去来宛(元禄四年七月十二日付)……………六九

三三 正秀宛(元禄四年閏八月十日付)……………六〇

三三 句空宛(元禄四年秋筆)……………六〇

三三 去来宛(元禄四年九月九日付)……………六〇

智月宛

三三 (十日付、元禄三・四年九月筆か)……………六二

中尾源左衛門(槐市)・浜市右衛門(式之)宛

三三 (元禄四年九月二十三日付)……………六三

三三 去来(推定)宛(元禄四年筆か)……………六三

三三 千那宛

三三 (元禄四年九月二十八日付)……………六三

三三 曲水宛(元禄四年十一月五日付)……………六三

曲水宛

三三 (元禄四年十一月十三日付)……………六三

中尾源左衛門(槐市)・浜市右衛門(式之)宛

三三 (元禄四年十一月十八日付)……………六四

句空(推定)宛

三三 (元禄五年正月十六日付)……………六四

正秀宛

三三 (元禄五年正月二十三日付)……………六五

杉風宛(元禄五年二月七日付)……………六五

近藤左吉(呂丸)宛

三三 (元禄五年二月八日付)……………六五

三三 曲水宛(元禄五年二月十八日付)……………六六

三三 珍碩宛(元禄五年二月十八日付)……………六七

正秀宛

三三 (元禄五年三月二十一日付)……………六八

意専(猿離)宛

三三 (元禄五年三月二十三日付)……………六八

三三 去来宛(元禄五年五月七日付)……………六八

三三 無宛名(元禄五年夏筆か)……………六八

高橋喜兵衛(怒離)宛

三三 (元禄五年七月十四日付)……………六九

去来(推定)宛

三三 (元禄五年九月八日付)……………六九

菅沼外記(曲水宛)

三三 (元禄五年九月十七日付)……………六九

半左衛門宛

三三 (元禄五年十一月二十七日付)……………六九

意専(猿離)宛

三三

二二	許六(推定)宛 (元禄五年十二月八日付)……………六三三
二三	許六宛 (元禄五年十二月十五日付)……………六三三
二四	此筋・千川宛 (元禄五年十二月二十三日付)……………六三四
二五	森五介(許六)宛 (元禄五年十二月二十八日付)……………六三四
二六	馬指堂(曲水)宛 (元禄五年十二月)……………六三五
二七	許六宛(元禄六年正月十二日付)……………六三五
二八	木因宛(元禄六年正月二十日付)……………六三五
二九	菅外記(曲水)宛 (元禄六年正月頃筆か)……………六三六
三〇	菅沿外記(曲水)宛 (元禄六年二月八日付)……………六三六
三一	岸本八郎兵衛(公羽)宛 (元禄六年三月五日付)……………六三七
三二	岸本八郎兵衛(公羽)宛 (元禄六年三月七・八日頃筆か)……………六三七
三三	岸本八郎兵衛(公羽)宛 (元禄六年三月十日付)……………六三七
三四	岸本八郎兵衛(公羽)宛 (元禄六年三月十二日付)……………六三六
三五	許六宛 (元禄六年三月二十日頃筆)……………六三六
三六	不玉宛(元禄六年春筆)……………六三六
三七	荆口宛 (元禄六年四月二十九日付)……………六四〇
三八	許六宛(元禄六年五月四日付)……………六四〇
三九	白雪宛(元禄六年八月二十日付)……………六四三

二二	松倉文左衛門(嵐竹)宛 (元禄六年八月二十八日付)……………六四三
二三	許六宛(元禄六年十月九日付)……………六四三
二四	曲翠(曲水)宛 (元禄六年十一月八日付)……………六四三
二五	怒離宛(元禄六年十一月八日付)……………六四三
二六	荆口宛(元禄六年十一月八日付)……………六四四
二七	松尾半左衛門宛 (元禄七年正月筆)……………六四五
二八	意専(猿雛)宛 (元禄七年正月二十日付)……………六四五
二九	曲翠(曲水)宛 (元禄七年正月二十九日付)……………六四六
三〇	怒離宛 (元禄七年正月二十九日付)……………六四六
三一	去來宛 (元禄七年正月二十九日付)……………六四六
三二	梅丸宛(元禄七年二月十三日付)……………六四七
三三	曲水宛 (元禄七年二月二十三日付)……………六四七
三四	森川許六宛 (元禄七年二月二十五日付)……………六四八
三五	無宛名(元禄七年春筆)……………六四九
三六	乙州宛(元禄七年四月七日付)……………六四九
三七	無宛名(元禄七年五月二日付)……………六四九
三八	曾良宛(元禄七年五月十六日付)……………六五〇
三九	水固宛(元禄七年閏五月五日付)……………六五〇
四〇	山田屋七郎右衛門(雪)宛 (元禄七年閏五月十日付)……………六五〇
四一	去來(推定)宛 (元禄七年閏五月十八日付)……………六五二
四二	曾良宛

二五	杉風宛 (元禄七年閏五月二十一日付)……………六五三
二六	猪兵衛宛 (元禄七年閏五月二十一日付)……………六五三
二七	支考宛 (元禄七年閏五月二十三日付)……………六五三
二八	曲翠(曲水)宛 (元禄七年五月晦日付)……………六五五
二九	杉風宛(元禄七年六月三日付)……………六五六
三〇	猪兵衛宛(元禄七年六月三日付)……………六五六
三一	猪兵衛宛(元禄七年六月八日付)……………六五七
三二	許六宛(元禄七年六月十五日付)……………六五七
三三	李由宛(元禄七年六月十五日付)……………六五七
三四	杉風宛 (元禄七年六月二十四日付)……………六五八
三五	曾良宛(元禄七年七月十日付)……………六五九
三六	去來宛(元禄七年八月九日付)……………六六〇
三七	智月宛(元禄七年八月十四日付)……………六六〇
三八	露川(推定)宛 (元禄七年八月二十日付)……………六六一
三九	去來(推定)宛 (元禄七年九月十日付)……………六六一
四〇	杉風宛(元禄七年九月十日付)……………六六二
四一	此筋・千川(推定)宛 (元禄七年九月十七日付)……………六六三
四二	松尾半左衛門宛 (元禄七年九月二十三日付)……………六六三
四三	意専(猿雛)・土芳宛 (元禄七年九月二十三日付)……………六六四
四四	正秀宛 (元禄七年九月二十五日付)……………六六四

一七	曲翠(曲水)宛 (元禄七年九月二十五日付)	六五
一七	松尾半左衛門宛 (元禄七年十月付)	六五
一七	遺状 その一	六六
一七	遺状 その二	六六
一七	遺状 その三	六七
一七	意専(猿雛)宛 (年月不詳・二十七日付)	六七
一七	意専(猿雛)宛 (年月不詳・二十三日付)	六七
一七	又七(乙州)宛 (年月不詳・二十一日付)	六八
一七	無宛名(年月日不詳)	六八
一七	無宛名(年月不詳・二十四日付)	六八
一七	真偽未詳の部	六八
一七	一 任口宛(十六日付)	六九
一七	二 許六宛(六月二十八日付)	六九
一七	三 甚左衛門宛(霜月十七日付)	六九
一七	四 無宛名(遊月二十四日付)	七〇
一七	五 無宛名(十九日付)	七〇

句合・評語編

一	貝おほひ	六七
二	十八番発句合	六八
三	田舎の句合	七〇
四	常盤屋の句合	七〇
五	批点懷紙(断簡四句)	七四

六	かうじや孫作宛(八日付)	六五
六	参考の部	六五
一	其角宛(無日付)	六七
二	其角宛(十七日付)	六七
三	許六宛(神無月十日付)	六八
四	許六宛(無日付)	六八
五	北枝宛(十月十三日付)	六八
六	北枝宛(正月二十四日付)	六八
七	北枝宛(六月二十七日付)	六八
八	嵐雪宛(三月二十三日付)	六八
付	録	六八
芭蕉受信書簡集		六八
一	其角書簡 (貞享三・四年頃正月二十五日付)	六五
二	越人書簡 (貞享四年十一月二十二日付)	六五
三	杉風書簡 (元禄三年九月二十五日付)	六五
四	曾良書簡 (元禄三年九月二十六日付)	六五

六	初懷紙評注	七四
七	統の原句合(冬の部)	七三
八	東藤 阿吟批点懷紙 とはなしの巻	七五
九	東藤 阿吟批点懷紙	七五

五	智月書簡 (元禄三・四年頃八月十三日付)	六六
六	嵐蘭書簡(元禄四年夏頃筆か)	六六
七	去來書簡 (元禄七年五月十四日付)	六九
八	許六書簡 (元禄七年閏五月十九日付)	六九
九	桃隣書簡 (元禄七年六月二十三日付)	六九
一〇	杉風書簡 (元禄七年六月二十八日付)	六九
一一	里東書簡(元禄七年七月一日付)	六九
一二	素覧書簡(元禄七年七月六日付)	六九
一三	木節書簡 (元禄七年七月二十二日付)	六九
一四	堤久兵衛(利合)書簡 (元禄七年八月一日付)	六九
一五	北枝書簡(元禄七年八月一日付)	六九
一六	車庸書簡(元禄七年八月三日付)	六九
一七	洒堂書簡(元禄七年八月三日付)	六九
二	あたゝかにの巻	七六
三	東藤 阿吟批点懷紙 中／＼の巻	七六
四	梅雀 阿吟批点懷紙	七六
五	桐溪 阿吟批点懷紙	七六
六	露沾等六吟批点懷紙	七六

三	探丸等三吟批点懷紙	七〇
四	秋の夜評語	七二
五	批点懷紙 春雨やの巻	七三

存疑の部		
一	批点懷紙 梅接ての巻	七四

〔追加〕		
	芭蕉批点歌仙卷	七五

漢句・和歌・その他

一	漢句……………	七六	誤伝の部……………	七〇	四	月見の献立……………	七二	
二	和歌・狂歌・鄙歌……………	七六	その他……………	七二	五	俳席三ヶ条……………	七三	
	存疑の部……………	七六	三	万菊丸いびきの図……………	七二	六	会式……………	七三

発句索引	七三
------	----

芭蕉足跡図	七五
-------	----

解 説

偉人の生涯について、人はとかく波瀾重畳を求め、これを偶像化し、美化しようとする。芭蕉についても例外ではない。旧説に、芭蕉の生家を貧家のごとく扱うのも、長じて主家を無断出奔したとするのも、江戸出府後の生活を困窮辛苦のそれであったとするのも、英雄の生涯に波瀾を求める世間通常の情を背景にして生まれたものである。木槿むぎげの一句に心眼を開き、古池の句に得悟したとすることきも、そうであろう。晩年芭蕉の風が俳壇を全く支配したかのごとく見るのも、またその中に加えられる。

芭蕉を理解するためには、正確な資料によって、その作品を熟読玩味することである。旧説にならず、直ちに作品について、作品を通して、芭蕉を知るべきである。本書編集を敢て企てた理由の一斑はそこにある。

一、芭蕉について

芭蕉の父は、伊賀国柘植つげの産、松尾与左衛門といい、家は無足人むそくにん級であった。無足人とは、俸禄は給せられないが、十分に準ぜられ、いわば郷土に相当すると言えようか。芭蕉が柘植で生まれたか、父が城下の上野に出てから、上野の赤坂の家で生まれたかは、正確には解らない。あるいは前者であろうか。しかし、芭蕉、幼名金作が、少年時を上野で過ごし、後年上野を故郷と考えていたことは確かである。芭蕉の家は、上野では中流程度であったろう。芭蕉が十三歳の時、父が没し、兄半左衛門が家督を継いだ。

藤堂藩三十二万石余の中、伊賀一国は十万石余を占める。伊賀を治めるため上野に城代家老が置かれ、藤堂采女家ふでめが代々その職についた。芭蕉が仕えたのは、その下にあつて代々侍大将の家である藤堂新七郎家当主良精よしよの嗣子良忠よししであった。十九歳頃、俳諧を嗜むことが縁となつて、出仕したと見ておく。良忠（蟬吟）と共に貞門の俳諧に遊び、俳書にも入集する。二歳年長の良忠が死んだのは、芭蕉が二十三歳の春で、その後間もなく芭蕉は主家を去った。以後、兄半左衛門の家の部屋住の身として勉強に励み、殊に俳諧に力を入れた。京都にもしばしば出て、良忠の師であつた北村季吟の門に出入し、貞門の俳書に作品がしばしば入集するようになった。寛文十二年二十九歳の正月二十五日、発句合『貝おほひ』を、上野の天満宮に奉納した。その年の春、江戸に出府したとするの

が通説である。折から俳壇に新風（談林風）が吹こうとして居り、江戸の俳壇もたちまち談林化していった。芭蕉もその中で、数年の中に俳壇に地歩を占め、三十四、五歳の頃には新進の俳諧宗匠として、門人を擁し、盛んな活躍を示す。明るい、奇智縦横の作品が多い。

しかし、静かに転機が訪れつつあった。延宝八年、三十七歳の冬、芭蕉は市中日本橋本舟町の住居を去って、隅田川に向こう岸、深川の地に退隠する。華やかで、おもしろい、俳諧宗匠の生活から退隠して、隠者になろうとする。宗匠生活をやめ、隠者になることによって、俳諧に、風雅に、献身しようとする。消極的な、無為の隠者ではなく、風雅のために生きること、人生の意義を見出し、風雅のために積極的に生きようとする姿勢である。そのために、尋常世間の人の眼から気違いじみていると見られても仕方がない。あえて風雅の狂人、風狂になろうと覚悟する。当然作風の大転換がある。蕉風が漸く始まるのである。

天和二年十二月二十八日の江戸大火で、深川の芭蕉庵は類焼した。芭蕉は甲州に流寓し、江戸に戻ったのは、天和三年五月頃である。翌貞享元年秋八月、芭蕉は江戸を立てて郷里に赴き、翌年の二月江戸に戻るまで、大和・山城・近江の各地を歩き、大垣・桑名・熱田・名古屋等に杖を曳いた。四十一歳である。久しぶりに故郷へ戻ったのは、俳諧隠者として、漸く自得の心境があったからであろう。風狂という錦を着た帰郷であった。それは「野ざらし紀行」という紀行文になった旅である。

江戸に戻った芭蕉の身辺は、心境的にも、生活的にも、一応の安定を見たといつてよいであろう。当時の世間は、俳諧師を「遊民」と見ていた。しかし芭蕉に対しては、世間通常の俳諧師とは違った、高雅隠逸の詩人としての評価が定まりつつあった。芭蕉はいよいよ風雅三昧の生活にうち込んだ。生活が芸術化され、生活と芸術が一体化される。生活即俳諧である。それも、生活の方を俳諧に引き寄せた意味での一体化である。貞享四年、四十四歳、八月中旬の月を賞でに鹿島へ旅をして、「鹿島詣」を草したのも、風雅三昧の生活の中からである。十月、盛んな壮行会のうち、帰郷を含む、西上の途についたのも同様である。だから、この旅は各地の門人に迎えられ、俳席を重ねながらの旅である。それと、愛寵の門人杜国（とくに）を供に、吉野・高野・和歌浦・奈良・須磨・明石・京と、楽しい遊歴の旅でもあった（後に「笈の小文」としてまとめられた旅である）。京から大津・岐阜・名古屋・熱田・鳴海などを、四箇月余も漂泊するが、それは各地の門人たちに歓迎され、蕉風を教化・宣揚する旅に近かった。岐阜・名古屋から、信州更科に中秋の名月を賞し（「更科紀行」）、ほとんど一年ぶりに江戸に戻った芭蕉を、人々は次々と訪問し、俳事は多忙で、いわゆる有名人の日常のごとくであった。しかし芭蕉の心中には、ある物思いが絶えなかった。年を越し、元禄二年の春を迎えても、それは募るばかりであ